

輸入粗飼料の情勢

全酪連購買部
購買推進課

北米コンテナ船情勢

日本側でのTHC（Terminal Handling Charge：日本のコンテナターミナルにおけるコンテナ取扱料）の17,000円/本（現行29,000円から46,000円に）値上げについて、多くの船会社で5月1日から決行されました。一部の船会社では3月1日から、あるいは4月1日から実施されています。

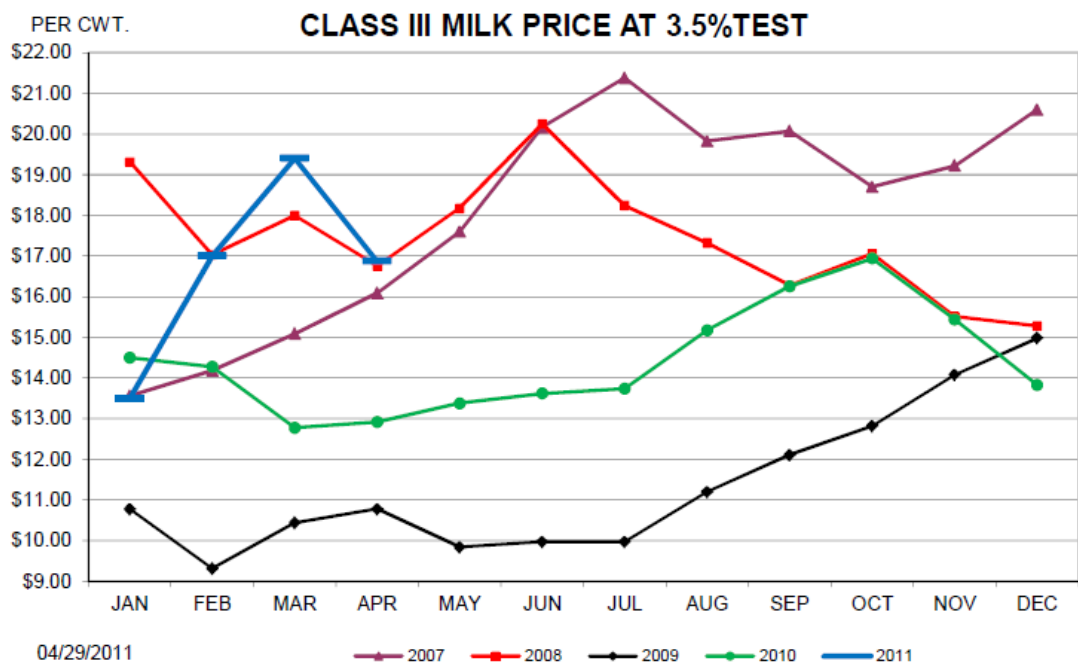
船積みについて、PNW出しを中心にスペースのタイト感は引続き顕著で、空コンテナの不足も顕著となっています。特にハイキューブコンテナ（高さ9.6フィート＝約2.9m）が不足しているため、スタンダードコンテナ（高さ8.6フィート＝約2.6m）しか船積み予約を受付けない船会社や、ハイキューブコンテナ使用時は追加チャージを求めてくる船会社も現れています。

先月号でご案内した京浜港を中心に日本を抜港（ばっこう：予定されていた寄港を取りやめること）する一部船会社の動きは、現時点では回避傾向にあります。しかしながら、震災後に建設資材や木材などの救援物資の船積みも増えているため、スペースのタイト感はより一層厳しくなっています。また、日本からの輸出も減少しているため、空コンテナの不足もより一層厳しくなりつつあります。今後も動向には注意が必要です。

また、日本のガソリンスタンドでも顕著なように、燃油代の上昇は勢いが止まらずに続いています。BAF（Bunker Adjustment Factor 燃料費調整係数：燃料価格変動に対して調整される割増運賃）を中心に、7月以降の海上運賃も値上げ基調で推移することが予想されています。

米国の乳価動向

3月の米国の乳価（下記グラフ参照：クラスⅢチーズ向け）は2月より更に値上がりしましたが、4月は2月と同程度まで値下がりしています。店頭向けのチーズ価格等が下がってきていることから、今後も弱含みで推移するとも予想されています。乳価が値上がりしているとはいえ、飼料コストも高くなってきたため、米国内酪農家の多くは依然として厳しい経営が続いています。



ビートパルプ

<米国産>

主産地では10年産の収穫が終了しています。穀物相場の高騰から、米国内での引合いが増えて生粕での出荷が多いことと、ペレットの生産が進むにつれて歩留まりの悪さが明らかになってきたことから、ビートパルプの生産量は当初の見込みより大幅に下回る模様です。また、欧州産や中国産の供給不足から、日本、韓国、欧州、米国内とあらゆる方面から米国産ビートパルプの追加の引合いが寄せられているようですが、供給できる余力はない模様です。

先月号でもご案内した通り、11年産ビート大根は、GMO種子も作付けされることとなりました。ほとんどの地域でGMO種子が作付けされる準備が進められています。冷涼な気候が続いているため、作付けの進捗が1-3週間程度遅れている地域もあるようです。11年産ビートパルプの生産の遅れが、早くも懸念されています。

<中国産>

10年産のビートパルプの生産量は増加する見込みですが、国内需要の増加を背景に輸出向けはむしろ低下している模様です。他産地での代替も厳しいことを背景に、中国産の輸出向けは、売り手市場に転じている模様です。

11年産のビート大根の作付面積は増える見込みですが、ビートパルプの国内需要はさらに増えることも考えられるため、輸出向けの余力が出てくるかは疑問視されています。

アルファルファヘイ

<カリフォルニア産>

インペリアルバレーでは、現在2番刈が進行中です。1番刈に続き、価格は高値で推移しています。このため、UAEや中国、韓国向けには成約があまり進まず、未だに買付けのタイミングを見計らっている模様です。米国内酪農家も、アルファルファの在庫がないために買わざるを得ずに買付けている例が多く、前述の通り依然として経営は厳しいと考えられ、需要がひと段落すれば価格が軟化するとも予想されています。11年産アルファルファの作付面積は、4/15時点でのエーカーレージレポートによると、前年対比99%の130,671エーカーとなっています。

北カリフォルニアでは、現在1番刈が開始されています。不安定な気候が続いているため、刈取時期を思案している生産農家も多いようです。インペリアルバレー以外での供給余力も加わることで、米国内や輸出向けの需要も分散されるよう、この北カリフォルニア地域で作柄が良好に進むことが期待されます。



インペリアルバレー アルファルファ2番刈圃場 4/21撮影

<ワシントン産>

10年産は早い段階でプレミアム品を中心にほぼ売切れ（成約済み）となっていますが、ここに来て米国内酪農家からも強い引合いがあり、カリフォルニア州からも買付けに来ている模様です。これは同州インペリアルバレーの11年産が高値で推移しているためで、同様に輸出向けからも強い引合いがある模様です。そのため、10年産は雨あたりのダメージ品でさえも品薄となっています。その一方で、産地では穀物相場の高騰により、昨秋からトウモロコシ（一部小麦）への転作が増えてきているため、11年産アルファルファの作付面積は10%程度減少すると予想されています。

①11年産の作付面積が減少していること、②10年産の繰越在庫がないこと、③カリフォルニア産が高値で推移していること、④国内向け・輸出向けともに引合

いが堅調なこと（カナダドルが強く推移しているため同国からの引合い増も一部で予想されている）、⑤生産コスト（肥料・燃料）が上昇していること、の5つの理由から、米国内向けの需要が落ち着いてきたとしても、11年産のワシントン産アルファルファの価格は、開始と同時に強含みで推移することが予想されています。

<オレゴン産>

11年産の作付面積については、トウモロコシや小麦など穀類への転作には適していない産地のため、前年と大きく変わらないと見込まれていますが、クリスマスバレー、クラマスフォールズともに、生育は遅れ気味と予想されています。4月終盤にも降雪が続くほど、冷涼な気候が続いている模様です。



クラマスフォールズ アルファルファ1番刈圃場 4/20撮影

<ネバタ産>

11年産の作付面積については、オレゴン産と同様に、穀類への転作には適していない産地のため、前年と大きく変わらないと見込まれています。

ネバタ産の近年の懸念材料は、カリフォルニア州の酪農家からの需要です。全米一の酪農生産州であるカリフォルニア州への、昨年のアルファルファの他州からの移入数量は、過去最高の1,034,000トン（前年対比129%）となっています。その移入元がネバタ州で最も多く、420,000トン（前年対比138%）となっています。これは、UAE・中国向けの旺盛なアルファルファの需要により、カリフォルニア州の酪農家が州内で買付けできなくなっていることが背景にあります。11年産以降も、ネバタ産は3タイ原料草のタイト化と、堅調な価格の推移が懸念されます。

<ユタ産>

11年産について、この地域でも冷涼な気候が続いているため、生育は1週間ほど遅れている模様です。

ユタ州でも、年々アルファルファの引合いが強くなってきています。国内向けだけではなく、UAE・中国・台湾向けも順調に出荷されているため、11年産は他産地と同様に、開始と同時に強含みで推移することが予想されています。



ユタ州 アルファルファ1番刈圃場 4/27撮影

チモシー

<米国産>

10年産は日本からの引合いが強く、10月中旬の出荷から屋内くん蒸費用が発生していてもタイト化が続いていましたが、価格が大幅に高値になったことから、日本向けの出荷は徐々に減少してきた模様です。しかしながら、産地では早い段階でハイグレード品を中心に売切れ（成約済み）となっているため、産地在庫がほとんどないことには変わりはない模様です。

酪農用、馬用ともに、これまで順調なチモシーの需要がある一方で、これ以上の価格上昇が見込めないとの見方もあり、穀物へ転作される圃場も一部であるようです。11年産の作付面積については、コロンビアベースンでは5-10%の減少、エレンズバーグでは前年並みと予想されています。

<カナダ産>

レスブリッジ（南アルバータ）では、今冬は例年以上の降雨・積雪があったため、生育期の灌漑用水への懸念はない模様です。また、ドライランド（中央アルバータ）でも、今冬は例年以上の降雨・積雪がありました。土壌水分も問題ない模様です。

両産地とも、11年産の作付面積については、前年並みと予想されています。生産量が増加するか、作柄はどのようになるかは、例年通り、全ては今後の天候次第となります。

スーダングラス

インペリアルバレーでは、先月号でもご案内した通り、穀物相場の高騰から小麦

の作付面積が増えています。4/15時点でのエーカーレージレポートによると、前年対比130%の75,006エーカーとなっています。小麦の作付面積が増える場合は、早播きスーダングラス＝ハイグレード品の供給数量が減少する傾向にありますが、11年産スーダングラスの作付面積は思ったほど減少せず、当初の予定よりも増えているのが現状です。5/1時点でのエーカーレージレポートによると、前年対比91%の37,855エーカーとなっています。これは、小麦と同様にスーダングラスも生産農家にとっては魅力的な価格で推移しているため、多くの生産農家が休耕地を復活させてスーダングラスを作付けしたため、と考えられています。

11年産は今後の天候次第ではハイグレード品の数量増加も期待されますが、一方で10年産と同様に、日本からの引合いが強すぎると、産地価格は強含みで推移する可能性もあります。今後の動向には注意が必要です。

クレイングラス（クレインは全酪連の登録商標です）

10年産は、昨年11月から韓国への引合いが強かったため、大手サプライヤーではローグレード品を含めて、ほぼ全て売切れ（成約済み）となっています。韓国からは引続き引合いがあるようですが、既に売切れとなっているため、バミューダハイに需要が移行している模様です。

11年産の作付面積について、4/15時点でのエーカーレージレポートによると、前年対比106%の12,930エーカーとなっています。豪州産オーツハイや米国産チモシー・ストロー類の情勢を受けてか、韓国からのクレイングラスの引合いが引続き強いため、11年産の産地価格は開始と同時に高値で推移しています。今後の動向に注意が必要です。

ストロー類

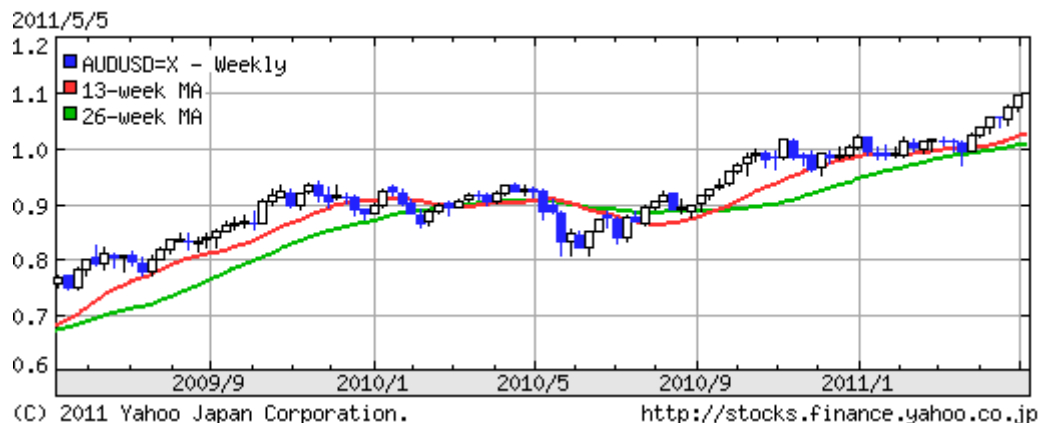
10年産は、韓国向け、日本向けともに順調に出荷されている模様です。供給数量の不足が懸念される在庫量から、産地価格は今後も強含みで推移すると予想されています。

11年産の作付面積について、引続き種子の需要が低迷しているため、また穀物への転作がさらに増えることが懸念されるため、フェスキューは5-15%の減少、ライグラスは前年並みと予想されています。

豪州産オーツハイ

各産地・各サプライヤーの共通の問題として、米国ドルに対して豪州ドルが強く推移していることが挙げられます。4月末時点では米国ドル対比1.09超となっており、3月中下旬から9-10%も上昇していることとなります。そのため、5

月から7月にかけて、豪州産オーツハイはさらなる値上げが見込まれています。



外国為替 豪州ドル/米国ドル

<西豪州>

輸出向けが「史上最高値」で推移している10年産について、国内（酪農・肥育・羊）向けの相場はそれよりもさらに高い価格で推移しています。生産農家がまだ抱えていそうな未成約分のオーツハイについても、大半が国内向けに売られていると予想されています。

西豪州産では依然として旱魃傾向が続いています。まとまった降雨もなく、このまま乾燥した状態が続けば、雨を待たずに5月から播種をする必要に迫られています。11年産オーツハイの作付面積については、安定した収入が見込める穀類への転作が多いと考えられるため、20-40%程度減少すると予想されています。



西豪州 オーツハイの播種準備ができた圃場 4/28撮影

<南豪州>

西豪州での不足から引合いが南豪州に流れてきているため、また韓国からのローグレード品の引合いが堅調なため、10年産の産地価格は強含みで推移しています。アデレード港出しの船積みスペースのタイト感は引続き顕著で、南豪州では、海上

運賃の値上げと不安定なデリバリーが今後も懸念されています。

南豪州では1月まで断続的に降雨が続いたため、土壌水分に問題はなく、早い地域では播種が始まっている模様です。しかしながら、西豪州と同様に、安定した収入が見込める穀類への転作が多いと考えられるため、11年産オーツヘイの作付面積については、5-20%程度減少すると予想されています。

<東豪州（ヴィクトリア州）>

メルボルン港出しもアデレード港と同様に船積みスペースのタイト感が顕著で、東豪州（ヴィクトリア州）でも、不安定なデリバリーが今後も懸念されます。

ヴィクトリア州では南豪州と同様に1月まで断続的に降雨が続いたため、土壌水分に問題はなく、例年通り5月下旬から播種が始まる見込みです。しかしながら、未だに10年産の雨あたり品を売り切れていない生産農家が多く、作付け意欲は減退している模様です。そのため、11年産オーツヘイの作付面積については、30%程度減少すると予想されています。

以 上